

地域が動き出す！～寿都町における BYWAY の取り組み

— オイスター・ビレッジを拠点とした交流人口と地域消費の拡大 —

2018年4月、寿都町に新たな観光スポット「スツツ・オイスター・ビレッジ」が開業しました。

4月10日に、寿都町や北海道経済産業局、中小企業基盤整備機構、はまなす財団、旅行エージェンシーなど関係する機関ほか約80名が参列する中、オープニング・セレモニーが開催され、同18日からは施設内のカキバーベキュー・テラス「寿都湾かき小屋」、町内特産品の物販施設「うたすつマルシェ」として営業を開始しました。



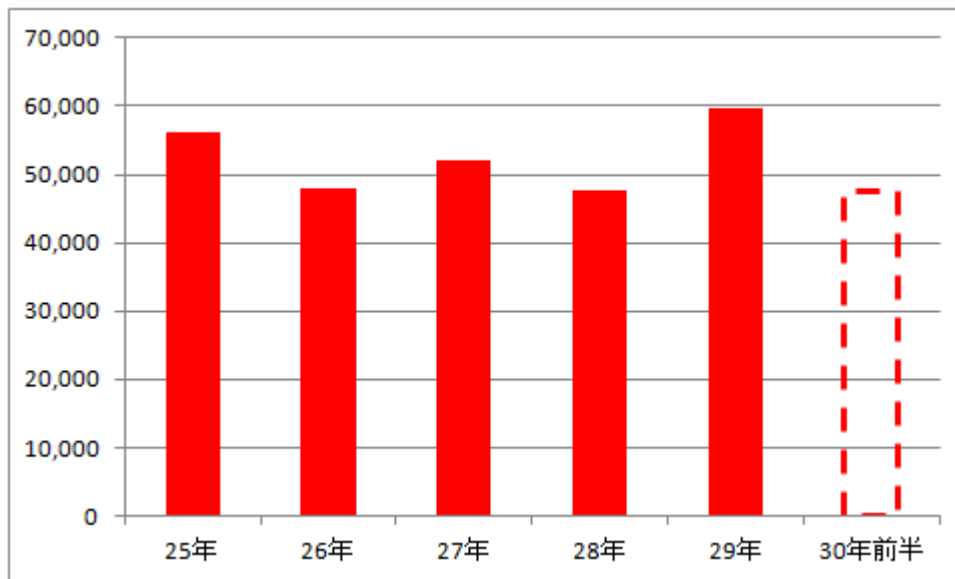
バーベキュー・テラス「寿都湾かき小屋」



オープニング・セレモニーの様子

美谷地区で開業した当該施設は、7か月で約21,000人（2018年11月末現在）を集客したほか、寿都湾の対岸に当たる本町の道の駅「みなとまーれ寿都」でも平成30年度前半だけで48千人を集客し、通年の道の駅利用客数の9割程度の入り込みをしています。

また町営温泉「ゆべつのゆ」でも30年度上半期で約1万人の増加を見るなど、寿都町全体に回遊（BYWAY）効果が出ていることが確認されています。



寿都道の駅の利用客数（寿都町調べ）

（寿都町を取り巻く環境）

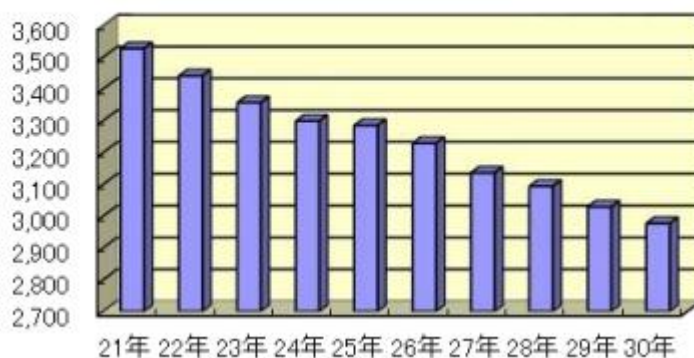
寿都町は日本海に面し、人口約3,000人。江戸時代より豊富なニシン漁を背景に漁業を中心として発展してきた町です。しかし、ニシンの減少や200海里問題によって定置網・刺網漁、沖合漁業とも伸び悩んできました。一方で比較的穏やかな寿都湾の特性に応じた栽培漁業の展開を図ったことで、漁獲量はほぼ安定傾向にあります。地元産業の大半が水産加工業であり、「生炊きしらす佃煮」「ホッケ飯寿し」は町の名産品として知られています。

また、函館、江差と並び古くから水産の拠点として、また水産資源の集散地として栄えてきた歴史があることから、日本海岸特有の景観と、ニシン御殿、商家跡や寺院など歴史的建造物を多く保有しており、道立公園を有する「弁慶岬」、自治体で全国初の「風力発電施設」、寿都温泉「ゆべつのゆ」などの観光名所も有しています。近年は、寿都の海の味覚やせり体験、乗船体験など寿都の海をまるごと堪能できる「寿都港 かき・おさかな市」などの体験型観光イベントが奏功し、集客につながってきました。



出展：寿都町観光パンフレットより

各年人口総数推移【住民基本台帳(3月末現在)】
人口数 (人)



出展：「寿都町統計資料 2018」

しかし、日本海特有の資源、特に魚介の宝庫でありながら、いわゆる通過型観光地に甘んじており今一つインパクトに欠けていました。後志管内全体の観光入り込み客数の増加傾向に乗じ、さらにニセコ地域からわずか 20km 程度の距離にあることから、効果的な交流人口増加策の構築が急がれているところでした。



歴史的建造物「カクジュウ佐藤家」



温泉施設「ゆべつゆ」

(事業の経緯)

はまなす財団では、2003 年度から 2006 年度に北海道開発局事業「道央圏の地域整備の展開構想推進業務」を小樽開発建設部から受託し、「後志広域の観光戦略の検討」をプロジェクト項目として北海道開発局、後志総合振興局、小樽市をはじめとした 20 の自治体、及び民間のメンバーで課題と対策を検討しました。その結果「従来の報告書で終了するのではなく具合的な取り組みへ」の方針で約 30 のアクションプランを策定しました。

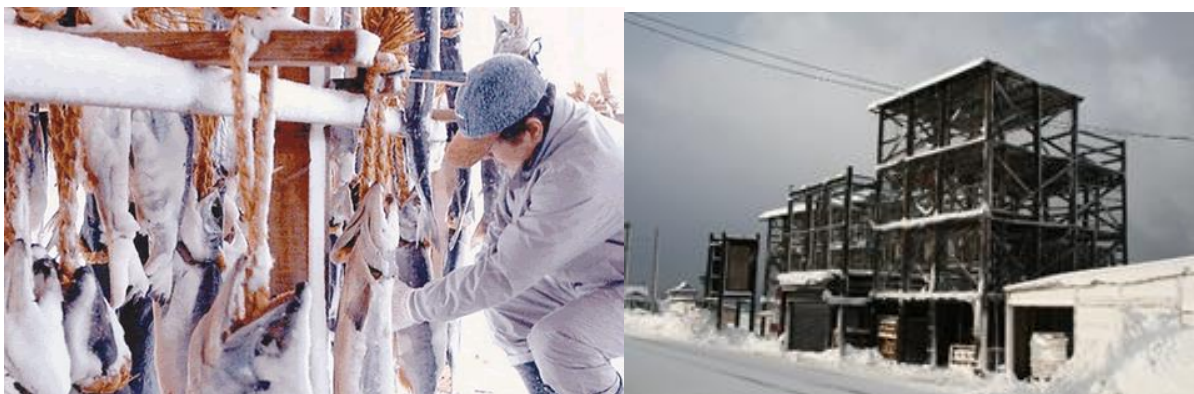
それを受けて当財団では、同プランの中でも優先順位が高い後志の地域情報を高品位に発信する雑誌「BYWAY 後志」の発行支援、小樽市民の観光を醸成する雛巡り支援など地域に応じた様々な支援を展開してきました。

さらに 2009 年度から 2 カ年、国土交通省北海道局から「食と景観による人口低密度地域の自立・活性化に関する調査業務」を受託し、特色ある食・景観等資源を擁する寿都町も対象とした経緯があり、以降「景観と食資源、交流人口による地域振興」を提唱してきたところです。

(事業主体者の事業構想)

寿都町には既にこれらの資源を活用しながら水産加工業を営む「吉野商店」があります。

吉野商店は、もともと寿都湾の東側にある美谷地区で雑貨販売を行ってきましたが、周辺の人口減少・高齢化を受け、次の事業の柱が必要と感じたことから日本海で獲れる鮭の加工に着手しました。日本海で水揚げされる鮭は脂が少ないと言われ、商品価値が低く見られる傾向にありますが、鮭の本来の旨味を充分引き出すためにしっかり塩をほどこし、木樽で熟成させることと、海辺に組まれた手作りの巨大やぐらで干し、海風に晒すことで旨みを熟成させる「寒風やぐら干し鮭寿」を商品化してきました（2005年水産庁長官賞受賞、上記についてはBYWAY後志第2号で紹介）。



「寒風やぐら干し鮭寿」を干すやぐらと作業風景

さらに寿都町の地域資源を活用したビジネスの可能性を模索し、2011年より岩手県で学んできた「かき小屋」を開業しました。その場でカキを焼いて食す豪快な演出もあって口コミで広がり、「かき小屋」は2014年に年間13,000人の来客を記録しました。



かき小屋

カキに加え、寿都町特産のシラスを活用した北海道初の生シラス丼を提供したところ、こちらも高く評価され、2015年度より、店舗に隣接する空き家を「しらす会館」として営業し、シーズン中は1ヶ月に1,100人以上を集客する活況を見せています。

吉野商店から約2km離れた国道沿いに、かつて漁業倉庫として使われてきたレンガ造りの建物2棟があります。歴史的な建物であり寿都湾と一体の景観をつくる資源価値の高い建物群ですが長い間使われずに来ました。吉野商店では「かき小屋」の客が増加し対応に

限界があることから、この建物群を活用して「かき小屋」を含めた寿都町の食と景観をテーマとした「スツツ・オイスター・ビレッジ」構想ができあがり、具体化に向けてはまなす財団に相談があったものです。



オイスター・ビレッジに活用される前のレンガ倉庫群

（はまなす財団の地域づくり提唱）

当財団では、「かき小屋」の入込み客を、道の駅「みなとまーれ寿都」を中心とした本町をはじめ様々な観光資源に恵まれた町内を回遊してもらうことが寿都町の観光振興に効果をもたらすと提唱し、寿都町、吉野商店との合意のもと、事業構想を固めて吉野商店の施設整備に関する資金確保、マーケティングに関し、事業計画作成から事業化、事業拡大まで支援する国のスキームである経済産業省「地域産業資源活用事業」での取組を提案しました。

（中小企業基盤整備機構北海道による事業支援）

本事業では、産業振興に活用すべき地域産業資源が市町村ごとに登録されています。寿都町では食資源として「シラス、ホッケ、寿カキ」が登録されています。この資源を有効活用して事業拡充する民間事業と広域観光に取組む寿都町及び関係機関が連携した「スツツ・オイスター・ビレッジ整備と寿都の歴史・文化・マリンフードを組み合わせた観光事業」として2015年に事業計画の法認定を受けました。

以降、北海道経済産業局及び中小企業基盤整備機構北海道の支援を得て事業化を進め、施設や集客策のコンセプト作り、詳細設計、資金確保など逐次、事業主体と関係機関の連携のもとに進め、冒頭記載の開業に繋がったものです。

（寿都町による連携事業の整備）

当該事業のパートナーである寿都町においても、「観光まちづくり」「食と観光」「景観」など地域資源の活用による寿都らしい独自色を出した多様な取り組みがなされています。ニセコエリアの「寿都アンテナショップ神楽」、まちの歴史資材・旧鯨番屋を改装した「そば処鯨御殿」の開業やベーカリーの誘致など観光客の入込み増と回遊を促す整備が進んでいます。シーズン中には「スツツ・オイスター・ビレッジ」と連携して、国道229号沿いに「寿かき」「しらす」の幟が林立するなど「元気のある町」として周辺地域からも話題となっています。

上記のように、はまなす財団では「食や景観その他、地域資源を活かした地域づくり」を、地域コンセプトの検討から地域事業者の事業支援、地域への効果検証といった一連の流れを関係機関の連携と支援も得て「地域が動き出す取り組み」の具体化を進めているところです。



<ポイント>

- ◆ 国土交通省（北海道開発局）事業で地域振興の理念と構想を固め、経済産業省事業で民間活力を伸ばし地域振興と産業形成に繋がる相乗効果を具体化（はまなす財団が双方事業の有効活用を提唱）
- ◆ 地域内でのリーダー（行政）とプレーヤー（民間事業者）の有機的な連携（はまなす財団が連携策など支援）
- ◆ 民間事業者が地域資源を活用した新事業を構想し達成する（はまなす財団が提案した経済産業省「地域産業資源活用事業」等の利用による資金確保支援と事業推進コーディネート）

<今後の課題>

- ◆ シーズンオフの対応（夏場はカキを食べる習慣が薄い、冬の食資源活用等）
- ◆ 通年観光の確立（高速道路の余市延伸、ニセコからの観光客誘致の対応等）
- ◆ 交流人口及び滞在時間の増に対する町内宿泊施設の拡充ほか